

学校型メンタリング・プログラムと地域の人々

—米国イリノイ州シャンペン・アーバナ市の事例を中心に—

School-based Mentoring Program and the People in the Community:
Focusing on a Case of Urbana-Campaign in Illinois in the U.S.A

渡辺かよ子 (Kayoko WATANABE)

This study investigates through interviews how the school-based mentoring program cooperates with the community. The number of the participants in the school-based mentoring program has been increasing because of its less participation-time requirement and environmental safety. The case of Champaign-Urbana One-to-One Mentoring Program, a school-based mentoring program in Illinois, shows that the program earned the goodwill of the various people in the community and that both mentee and mentor are enjoying mentoring activity.

1. はじめに

本稿は今日急速に拡大している学校型メンタリング・プログラムを地域の人々がどのように支援しているのか、米国イリノイ州アーバナ・シャンペン市の Champaign-Urbana One-to-One Mentoring Program に参加しているメンターへの聞き取り調査から明らかにしようとするものである。

メンタリングとは、成熟した年長者であるメンターと、若年のメンティとが、基本的に一対一で、継続的定期的に交流し、適切な役割モデルの提示と信頼関係の構築を通じて、メンティの発達支援を目指す関係性を意味する。メンタリング・プログラムは、日常的自然発生的なインフォーマルなメンタリングとは異なる、フォーマルな人為的・制度的なメンタリングを提供するものである¹。メンタリング・プログラムは活動場所によって以下のように三分類される。①場所が特定されないコミュニティ型プログラム、②特定の場所でのプログラム、③テレメンタリング、である。近年、環境の安全性と交通の利便性が確保され、メンターの個人負担や時間的拘束が少ない（典型的には学期中に週1回1時間）学校型メンタリング・プログラム（School-Based Mentoring Program、メンタリング活動が専ら学校で行われるプログラム）が急速に拡大し、米国の現存するプログラムの約半数を占める②の特定の場所でのプログラムのうちの72%が学校型メンタリング・プログラムとなっている²。

本稿ではこうした拡大基調にある学校型メンタリング・プログラムの事例として、米国イリノイ州アーバナ・シャンペン市の Champaign-Urbana One-to-One Mentoring

Program（以下、Champaign-Urbana One-to-One と略記）を取り上げ、地域の人々がいかなる理由をもってプログラムに参加しているのか、資料調査と関係者への聞き取り調査から明らかにしたい。メンタリング運動を興隆させた市民のエネルギーの源泉を、文化といった曖昧な概念ではなく、個人個人の市民の意識や意図に見出したい。

2. Champaign-Urbana One-to-One メンタリング・プログラムの概要

まず米国のメンタリング運動の最近の動向について概括しておきたい。1997年に「メンタリング・サミット」の開催、2002年の「全米メンタリング月間」の開始と継続を経て、2005年にはメンタリング・プログラムに参加している大人は約300万人に達している。これは3年前の2002年より19%の増加、1990年代からは6倍の増加となっている。現在参加していない4400万人がメンターになることを真剣に考え、96%のメンターが他人に推奨している³。最近の新動向としては、「特別な支援」を必要とする子どものためのメンタリング・プログラムの導入が特筆され、研究成果を総括したハンドブックの出版によって理論と実践の協働が強化されると共に⁴、メンタリング・プログラムは連邦政策の一部となり、連邦議会による支援を受けながら、さらなる進化を遂げようとしている。

こうした米国のメンタリング運動の動向にあつて、Champaign-Urbana One to One は、メンタリング運動の拡大第一期⁵にあたる1994年に創設された。同プログラムは、シャンペン・アーバナの公立学校ならびにシャンペン・アーバナ・ビジネスコミュニティによる支援を受け、シャンペン市の小中高校16校、アーバナ市の同8校に地域の市民ボランティアによるメンタリングを提供している。メンティは概ね第2～3学年から参加することができ、メンターは学期中毎週1時間、校内で授業時間にメンティと会っている。本プログラムに積極的に参加して高校を卒業した学生には、カレッジ入学後の2年間、每学期500ドル、計2000ドルの奨学金が成績や経済的必要性等に関わりなく支給されている⁶。参加者は2007年9月には370組に達している⁷。

Champaign-Urbana One to One が募集するメンティは、以下の一つ以上にあてはまる生徒である。①学業成績が基準に達していない生徒、②友人との関係で問題を抱えている生徒、③出席状況が芳しくない生徒、④大人の役割モデルを必要とする生徒、⑤積極的な友人関係に乏しい生徒、である。メンターの要件としては、①青少年に対する純粋な関心、②柔軟性、③よき傾聴技術、④毎週1時間のメンタリング活動に実際的に無理なく参加できること⁸、である。

広報ポスターには、以下のような言葉が記されている。「孤独で、悲しみを抱え、怒り、恐れ、無視され、打ちひしがれているすべての子どもが、毎週1時間学校で、其の子をいっしょに遊び、其の子を励まし、その子を気遣い、その子のいうことに耳を傾け、そして来る年も来る年もその子といっしょにいる大人と会う、そんな場所を想像してみてください。達成できる全ての目標、変革できる全ての生活、そして実現できる全ての夢を想像してください。その場所はシャンペン・アーバナであり、あなたがそれを実現できるということ想像してください。毎週ほんの1時間であなただけ一人の子ども、そして地域コミュニ

ニティ全体をより強化するのを援助することができます。今日子どものメンターとなることを実践しなさい。」⁹

連邦政府による3年間の補助金を受けた同プログラムは、2007年9月の外部評価により、以下のような驚異的な成果を生み出している。成績向上者が71%（目標：05年9月までに5%、06年9月までに15%、07年9月までに30%が、メンタリング開始後12ヵ月後に少なくとも一つの主要学科目で成績向上。）、ペアの12ヶ月以上の継続率76%（目標：50%）、メンターのお蔭で学校へ行くのが楽しいという生徒の割合が93%（目標90%）、無断欠席が48%減少（目標40%）、である。また、担任教師から見て教室内での行動に、①問題解決スキルの向上、②社交スキルの向上、③情動的行動の減少、④内向的引きこもり行動の減少、のうちの一つに改善を示す生徒が78%（目標75%）となっている¹⁰。

上記のような驚異的な成果を生み出している Champaign-Urbana One to One に、地域の人々はいかなる理由から参加しているのか。

3. メンターへの聞き取り調査

1) パイロット・インタビュー（2004年6月）

聞き取り調査は2004年6月、2007年9月、2008年3月の3度、アーバナ・シャンペーン市の Champaign-Urbana One-to-One の事務局、メンターの職場等を訪ねて行った。筆者が始めて Champaign-Urbana One-to-One の事務局を訪ねたのは、2004年6月に SCRA でメンタリング・プログラムの理論的検討と日本のメンタリング・プログラムの現状について研究発表するために同市のイリノイ大学を訪れた際、たまたま開催されていた Champaign-Urbana One-to-One の資金集めのためのガレージセールに学会の合間に立ち寄り、パイロット・インタビューを行った時であった。事務局のある中学校の体育館に山と積まれた物品は、半ばゴミのようなものも含まれ、子どもたちや保護者、関係者がそれぞれ身近なものを持ち寄っていた。その時のレジ係りであった元教育委員会の方にメンタリング・プログラムは効果があるのか、成果の有無を尋ねると、「確実な証拠がある。」とおっしゃり、次のようなエピソードを話してくださった。「一人の男の子がメンターを長年にわたってメンタリングでチェスをしていた。まったく何も話さない子で、メンターは自分がメンティの何か役に立っているのか心もとないまま最後のメンタリングの日を迎えた。その日もメンティは何を話さず、チェスをしただけで別れた。メンティからのお礼の一言もないままメンタリングを終えたメンターは少し悲しい気持ちになった。それから数ヶ月して新学期が始まり、メンティが事務局に姿を現した。用件は、自分の弟にもメンターをつけてやってほしい、とのことであった。」ばたばたと人混みに紛れながら伺ったこうしたエピソードは、この時点で既に発表されていた Champaign-Urbana One-to-One のプログラム評価や、上述の最近の外部評価とも呼応している。

2) インタビュー（2007年9月）

第二回目に Champaign-Urbana One to One を訪ね、本格的に聞き取り調査を行ったのは2007年9月であった。事務局のバーバラ・リンダーさんの紹介を通じ、5人のメンタ

一に聞き取り調査を行った。Champaign-Urbana One to One と地域コミュニティや企業との連携について知りたい旨を伝え、協力団体の一覧表から役所、出版社、保険会社、大学、銀行の関係者の紹介をお願いすると、5人のメンターのメールアドレスを教えてください、事前にそれぞれの方にインタビューの趣旨を連絡して下さった。それぞれの方とのメールのやりとりの後、30分から1時間のインタビューを行うことができた。以下はその概要である。

<Aさん：公務員>

地域公園区の女性の開発コーディネーター。インタビューは森の中にあるAさんの職場の個室オフィスで行った。窓から入る秋のやわらかな木漏れ日を背にうけながら、作業ジャンパーを着て殆どノーメイクのAさんは快活にご自身のメンタリングの経験とメンタリング・プログラムに対する思いを語って下さった。

Champaign-Urbana One to One の創設以来、12年間、活動を継続しておられる。勤務時間に毎週1時間、近くの学校でメンタリングを行っている。現在のメンティは3人目である。主なメンタリングの活動はトランプであるが、いつも何をやりたいのか子どもに尋ねその都度決めている。メンティの担任の教師、保護者とも交流し、メンティに関する情報を共有しておられる。学校での担任教師は毎年替わっていくが、メンターは一貫性をもってメンティと関わっていることに意義がある。毎週1時間、同一の子どもと7年間にわたる交流は、「とてもやりがいのあること (rewarding experience)」と総括された。Champaign-Urbana One to One の目下の課題何かとお尋ねすると財源とのことであった。

(2007年9月17日)

<Bさん：会社員>

30代の出版社に勤務する多忙な男性マネジャー。インタビューは、森の中にあるBさんの職場の会議室で行われた。短い髪型で日焼けしたBさんはいかにもスポーツマンという風貌。最初、ご自身の参加経歴を端的簡潔に話され、半ば事務的な印象さえあったが、話題がメンティのことに移ると表情が一変し、メンティの成長から受ける感動を語って下さった。いわゆる遠距離結婚でパートナーとすすむために週末は数時間かけて隣町へ通っておられ、とにかく忙しく毎日をお過ごしの様子であった。

大学での専攻分野は経営学。出版会社の激務にあっても勤務時間の自由裁量があり、そうした中で毎週1回1時間学校を訪ねてメンタリングを行っているが、それによって生じた欠損業務は残業で補完しておられる。勤務時間中にメンタリング・プログラムに参加できるのは、有能で職務に精励し勤勉であることが前提であり、メンタリング・プログラムへの参加を職場が認めているからである。Bさんの勤務する出版社の同僚も、常時4、5人~10人くらいメンタリング・プログラムに参加している。同出版社はこうしたメンターの参加提供に加え、Champaign-Urbana One to One に会議や催しの際の会議室等の場所の提供、等でも協力している。学生時代、長らくB B B S (Big Brother Big Sister) に参加していたが、メンティが不登校になり、それによってメンティのプログラムの参加資

格がなくなった経験がある。B B B Sの関与の度合いが重いこともあり、当地に就職してから学校型メンタリング・プログラムである Champaign-Urbana One to One に参加するようになった。現在のメンティとの交流は7年目。両親と離別したメンティは祖母と同居し、祖母が養育にあっている。メンティが8歳の幼少からの交流で、こんなに小さかったメンティが今年15歳になり、自動車免許をとるなんて…とその成長を長年にわたり身近で見守ってこられた深い感慨を話してくださった。参加動機をお尋ねすると、単に楽しいから、またご自身に子どもがいないからとも。プログラム事務局が提供する研修会は非常に役立ち、参加者がメンタリングを通じて「違いを生み出そう」(make a difference) という意欲の増進に役立っているとのことであった。(2007年9月19日)

<Cさん：会社員>

30代の保険会社の女性管理副部長。インタビューはシャンペン市内のイリノイ大学キャンパス内のコーヒーショップで行われた。ストレートのロングヘアーときちんとしたスーツ姿がよく似合うCさんは、多忙な仕事の合間をぬって、筆者がわかりやすい場所ということでわざわざキャンパスタウンまで来てくださった。なかなか駐車場が見つからなくて、息せき切って小走りで約束の時間を少し過ぎて来られた。9月にしては暑い日で、汗を拭いアイ스티ーで喉を潤しながら、お話を聞かせてくださった。

専攻は政治学。メンティは8学年の女の子で3年目の交流である。毎週昼休み1時間、学校にでかけてメンタリングを行っている。学校は職場から徒歩5分の近さにある。Champaign-Urbana One to One への参加のきっかけは知人の紹介による。ある日、夫妻でプールに行った時、そこで知人が見知らぬ他人のメンティと交流しているのを見、子どものいないCさん夫妻はうらやましく思い、知人にそのことを伝えると、知人がメンタリング・プログラムを紹介してくれたとのこと。Cさんが勤務する保険会社は、メンターの参加提供に加え、Champaign-Urbana One to One に奨学金も提供しており、その趣旨は、「地域への還元 (giving back to community)」にある。メンタリング・プログラムへの参加によって従業員が子どものよき役割モデルとなり、それによって子どもがよりよい労働力となり、それを企業が雇用し、そうした労働力をもつ地域で企業が活動することは、究極的に企業の利益につながる。メンタリング・プログラムの研修について尋ねると、研修は3時間にわたり、ロールプレイやメンタリングで行っていいこと・悪いこと、メンタリング関係の限定性について学ぶとのこと。ご自身のメンティとの交流についてお尋ねすると、ボーイフレンドと洋服と歌以外には殆ど関心がないメンティとの交流は、主にトランプを楽しんでいるとのこと。最初はぎこちなかったが最近はそれもなくなった。学問や文化を重んじる恵まれた家庭で育ったご自身とは異なる家庭環境に育つメンティのよき役割モデルになろうとしているが、時にフラストレーションやコミュニケーション上の課題があることは否めない。メンティについて担任教師と情報を共有しており、学年によって変わる教師とは異なる役割をメンターは担うことができる。メンティの保護者とも行事等で交流しておられるが、限定的である。メンタリングは、一貫性、期待、確信という点で

「違いを生み出」(make a difference)している。大切なことは、メンターに適正な人を得ること。ご自身の職場内でのメンタリング・プログラムとその経験についてもお話くださった。(2007年9月20日)

<Dさん:退職者>

70歳代の男性退職者。地域のキャンパスコミュニティでは著名なユーモア溢れる元大学学生部長。退職後も地域や大学の数々の要職に就任し、積極的に社会活動をしておられる。当日もこうした社会活動関連の会議の合間の時間に、キャンパスタウンのコーヒーショップに来てくださった。お店の中で待つのか外で待つのか約束していなかったもので、しばらくの方なのかかわからず、間違った人に声をかけた末に、驚くほど若々しい感じのDさんとお会いすることができた。

DさんがChampaign-Urbana One to Oneに参加するようになったのは、退職を期に同プログラム事務局担当者からの依頼によるものであった。地域コミュニティのボランティア活動家として著名なリンダーさんに、退職して時間ができたはずだから是非参加するようにと半ば強制され参加するようになったとのこと。公私を通じ、もともと大の子ども好きのDさんの参加動機は、ご自身の子どもさんが家を離れ、かわいがる子どもが身近にいなくなったことがあり、とにかく、子どもといっしょに時間をすごしたいからとのこと。現在のメンティは、偶々、以前ご自身の妻(小学校教師)が担任した男の子で、交流は4年目である。メンティの家族共々よく知り合い、メンティとはいつもDさん夫人のことを「D先生は世界一いやな(mean)先生だっただろ。」と冗談を言い合っておられるとのこと。メンタリング活動については、事務局主催の研修会でメンタリングに際して守るべきルールとアイデアを学ぶものの、活動そのものはあくまでも自分流に行っている。内気で自信のないメンティに、毎週会うたびにガールフレンドはできたか、男たるものかくあるべしと激励しながら、ゲームや工作等をしながら交流しておられる。(2007年9月19日)

<Eさん:銀行員>

メンター暦7年の女性銀行員。インタビューを依頼したが出張中でかなわず、メールで以下のような丁寧なお返事をくださった。

①Champaign-Urbana One to Oneの創設当初は当該銀行から多数のメンターが参加していたが、人員上の問題等で、昨年自身のメンターが卒業した時には、当該銀行からの参加者はご自身のみになってしまった。ご自身は本プログラムを強く愛し、Champaign-Urbana One to Oneが子どもを学校に留まらせるのに役立っていることを強く信じている。メンティと会うことを楽しみにしており、メンティもそうであったと信じている。

②銀行は勤務時間内にメンタリングのために毎週1.5時間、職場を離れることを認めてくれた。このことは、地域コミュニティに関与する責任を持つ銀行にとってもいいことである。Champaign-Urbana One to Oneは当該銀行が地域コミュニティに包含され、我々の地域をより良い場所にするための何かを行っていることを別の方法で示すことにもなっ

ている。

③学校でメンティと毎週1時間会っている。学年の初めに、メンターは担当教師(団)と会って訪問して過ごす時間を示す。教師はメンターに大変好意的である。彼らはメンターのスケジュールを尊重しそれに応じてくれる。(時に他の人よりも離れるのが困難な場合もある。)メンタリングの活動はメンティが成長するにつれて変化していた。最初、我々がそれぞれ互いに知り合う段階にあっては、ボードゲームや工作、廊下を散歩しながら話したり、図書館に行ったり、コンピュータを使ったり、時には難しい学校の宿題を手伝ったりした。体育館でバスケットボールや他の球技をしているメンターもいる。何をするかは、単純に私たち(メンターとメンティ:筆者)が何に興味をもっているかによる。彼女をジョブ・シャドウイング・デイに職場につれていったことがある。楽しかった。

④メンティの母親とすばらしい関係性をもっている。時々彼女は私に電話をかけてきてくれ、本プログラムに大変協力的である。メンティの父親について多くを聞いているが会った事はない。おそらく彼は内気で変則勤務時間で働いているために(プログラム主催の:筆者)会食行事に参加できないでいるのではないかと思う。すべての教師は、Champaign-Urbana One to One に大変協力的である。学校のすべての子どもがメンターをほしがっているように見うけられる。メンターがいることは、間違いなく積極的な事柄である。

Eさんには自身が中学生の時、大学生のバレーボールの選手がメンターとなってくれた楽しい思い出がある。そのプログラムは1年だけであったが、同じメンティと学校時代をずっといっしょにすごし、定期的に会うことは大変重要なことだと思う。「本プログラムを十分に高く評価する言葉が見つからない」と総括された。

4. メンタリング活動セッションでのメンターとメンティへの聞き取り

2008年3月に再びシャンペン・アーバナ市を訪問し、今度は実際のメンタリングを行っているメンターならびにメンティに聞き取り調査を行った。アーバナ・ミドルスクールプログラム事務局に隣接するコミュニティ・ルームに待機し、そこを訪ねてくださったメンターとメンティのペアに聞き取りを行った。同インタビューは、同プログラムの事務局担当者のバーバラ・リンダーさんが当日、来訪したメンターに「メンタリングに関心を持つ日本からのお客様がコミュニティ・ルームにおられるので、できるだけメンティと二人で挨拶し、メンタリングがどんな風に行われているのか話してください。」というメモを残して行ってくださったために実現したインタビューである。

<Fさん>

獣医学部教授、学部長。ネクタイの上に明るい白色のセーターを着用した白人紳士。8時45分の活動開始の30分前に来られ、準備をされている時に、お話を伺うことができた。2007年9月から開始。半年前にジョージア州の大学からイリノイ大学に移籍。ジョージアではこのようなプログラムがなく新鮮に感じ参加した。メンター暦半年。メンティは7年生13歳。活動は工作や風上げ、バスケットボール、ソーシャルスキルの練習。風揚げは

最近マイナス 10 度で行う。週 1 時間木曜日の 1 時限。学部長という要職にあるが、学校が自身の職場から 5 分という近さと、メンタリングに理解をしめしてくれる同僚の協力による時間の融通によって、活動が可能になっている。メンティの得意教科は数学とのこと、しかしその数学も落第寸前の成績。メンティの個人情報も殆ど知らない。この日、メンタリングに来訪するも、この日偶々メンティが停学処分となり、会えず。おそらく暴力事件によるものと思われる。メンティは怒りのコントロール方法を学び、夏のインターンシップ先も決まって順風満帆と思っていたのに、とショックと自責の念にかられておられるご様子。事情把握に担任の先生を訪ねてゆかれた。

<Gさんペア>

メンティである黒人の 6 年生の女の子と共に来室。ご自身の紹介の後、女の子に自己紹介を促す。昨年 9 月から開始したメンター暦 6 ヶ月。G さんのお姉さんが本校の校長先生。校長の協力要請からメンタリング・プログラムに参加するようになったとのこと。G さんは心の底からメンティを愛し、メンタリングを楽しんでおられる様子。メンティは髪をきれいに結び上げバンダナで飾り、きらきら輝くガラスの飾りのついたベルトを着用する等、いかにもおしゃれ。好きな科目を聞かれて数学と答えるも、初対面のインタビューには口が重くはざかしそうな様子。メンタリングはどう？と聞かれると、「メンタリングは楽しい」と小さな声で、少し視線をそらしながらはざかしそうに答えてくれた。メンタリング活動は主に、室内ゲーム、コンピュータゲーム等。

<Hさんペア>

メンティである 6 年生の h 君が先に来室し、楽しみにメンターである H さんを待つ。小柄でそばかすいっぱい h 君は窓の外に来校された H さんの姿を見つけると大きく手をふった後、待ちきれずに校舎の玄関まで H さんを迎えに行く。作業服ジャンパーを着用され髯をたくわえた長身の H さんは終始無口で、インタビューにも殆ど反応を示されない。が、その分、h 君が丁寧に明快な英語で、日本語や日本への興味、忍者や映画等、積極的に話してくる。日本語は図書館から借りた本から学んだとのこと、相当数の語彙が理解できる。メンタリングの時間が楽しみで、H さんと過ごすのがとにかく楽しいとのこと。当日は H さんとバスケットボールを持って体育館にでかける。メンタリングの時間は学校の授業からぬけられることも楽しみ理由の一つとか。H さんと体育館から戻って再度来室し、インタビューに忍者の手品を披露してくれるも、H さんは終始、殆ど無表情で背後からメンティを見守っているのみ。メンターの存在そのものの重要性とは H さんのようなことをいうのかもしれない。1 時限（メンタリング・セッション）の終わりを告げるベルが鳴ると h 君は頭をテーブルに打ち付けるようにして残念がって教室にもどる。H さんは無表情でメンター記録簿に活動時間を記載して退出。

<Iさんペア>

イリノイ大学生物学部大学院博士課程の既婚女子学生。来月（4 月）には博士課程の資格審査試験を控えている。夫の法学研究科の大学院生も同プログラムもメンターでいっし

よに来校。夫のメンタリング・セッションが1時限、自身のセッションが2時限であるため、1時限はメンター室で待機しながら研究資料をとりだして自分の勉強。インタビューが声をかけ、自身も25年前には同じような資格試験を経験したこと等を話すと、多くを語ってくださった。メンティは6年生。昨年9月から開始。活動はおしゃべりが主、ゲーム、編み物。毎日の出来事や友人のことなどを話し、メンターは同じことが自分や自分の弟にもあったこと等を話して応じる。参加の動機は、以前からコミュニティでのボランティア活動に参加しており、特に今日の青少年問題、学力低下の問題等を聞くにつけ、教育は非常に重要だと思い参加。週に1時間を確保するのは難しいが時間は自分の意思で優先的に作り出していくもの。メンタリングは気分転換にもなり、指導教員にもこのボランティア活動のことは話している。メンタリングがよいのは宿題など特定の学習関連の活動ではなく、純粋に友人としていろんなことを話し関係性を築いていくこと。危機的状況にある特定の子もだけではなく、すべての子どもにメンターがいればよいと思う。こうしてメンタリングをしていることが、自分の専門分野である生物学を学ぶ生徒のリクルートにもなればよいと思う。研修会では多くのことを学ぶ。メンティとの関係性作りのためのスキル（質問や返事のしかた、話題等）や短期的には変化は見られなくとも長期的は変化が見られる等。メンティの女の子（6年生）が来室。メンターがインタビューへの挨拶を促し、「私がいいメンターかどうかお聞きになりたいそうよ」とメンタリングに関して話すよう促すも、メンティはいかにも恥ずかしげで視線をそらし、爪をかみながら、ゆっくりと殆ど聞き取れない小さな声で口ごもって話す。メンターは終始、その様子を見守る。そうこうしているうちに、メンターとメンティが部屋から出かけ、その様子は先ほどのインタビューへの様子とは驚くほど異なり、表情が豊かで大きな声で快活に話し、いかにもメンターを心より信頼し、両者の関係性がしっかりと築かれている様子が見て取れた。

<Jさんペア>

メンティは黒人の長身の6年生の女の子。おっとりした性格の数学と英語が得意な優等生で、ゆっくり話すのが印象的であった。特に語彙が豊富で、将来はバスケットボールの選手か会計士をめざしている。メンターが紹介した『ハリーポッター物語』が大好きで、そのストーリーを詳しく語ってくれた。年配メンターのJさんは殆どご自身のことは語らず、メンティを見守り、メンティの引き立て役に専念しておられた。メンティもメンターも見るからにメンタリングを楽しみにしている様子であった。メンタリングには教師の薦めもあったが、兄弟二人にもメンターがいるので自分も参加したいと思い申し込んだとのこと。メンタリング活動は色々な活動。母の日のプレゼントの写真の額を作ったり、祖母のためのイヤリングを作ったり。トランプではメンターを負かすほど強いとメンターは嬉しそうに話してくださった。

<Kさん>

警察官。映画のシーンから抜け出したような短い髪型の端正な顔立ちの方。赤いネクタイをしめ丈の長いダークブラウンの皮のジャケットの下にしるばせた拳銃を示し、ご自身

が警官でありメンターでもあることを説明してくださった。メンタリングが終わると上着を脱いで拳銃を見えるようにされ、学内パトロールに出掛けてゆかれた。本プログラムへは6年前から参加。前のメンティは卒業して大学生に。現在のメンティは6年生。去年の秋から開始。活動はメンティの求めに応じて、その時々には色々なことを行っている。BBBS等のコミュニティ型メンタリング・プログラムもあるが、自分の生活スタイルには学校型の方が合っている。今日、一人親家庭が増え、誰かが子どもを継続的に見守る必要がある。子どもには子ども自身の友人や子ども自身の世界があり、大人が踏み入れない世界はあるが、共に活動を行うことは楽しい。インタビューの最後に「他に何か質問はないか？」と尋問調で何度もおっしゃってくださったのが印象的であった。

5. 総括

以上、米国イリノイ州アーバナ・シャンペン市の One-to-One Mentoring Program を支えるメンターとメンティへの聞き取り調査を纏めた。学生を含む地域コミュニティの様々な職業の市民が、それぞれの次世代への思い、理由をもってメンタリング・プログラムに参加しておられる。改めて、一人一人の「見知らぬ人の親切」がメンタリング運動の起点となっていることを確認することができた。

こうした地域の人々の善意を直接、一人一人の生徒の支援に結びつけている学校型メンタリング・プログラムの拡大は、メンタリング運動の推進に果す学校の役割の重要性を示すと共に、地域コミュニティにおける共時的通時的な円環的生涯発達支援の拠点として学校そのものが活性化される可能性を示している。コミュニティ型メンタリング・プログラムに比べ、環境や施設、交通の利便性が確保され、メンターの個人負担や時間的拘束が少ない学校型メンタリング・プログラムは、日本の社会や学校文化との適合性を慎重に精査することによって日本におけるメンタリング運動の拡大に向けた有望な戦略となる可能性を秘めているように思われる。

¹ Dubois, D. & Karcher M. eds. (2005) *Handbook of Youth Mentoring*, Sage. Allen, T. D. & Eby, L. T. eds. (2007) *The Blackwell Handbook of Mentoring: A Multiple Perspective Approach*, Blackwell Publishing.

² Herrera, C. et al. (2007) *Making a Difference in Schools: The Big Brothers Big Sisters School-Based Mentoring Impact Study*, Public/Private Ventures.

³ MENTOR (2006) *Mentoring in America 2005: A Snapshot of the Current State of Mentoring* (<http://www.nemtoring.org/leaders/files/pollreport.pdf>.)

⁴ Dubois, D. & Karcher M. eds. (2005) op.cit. Allen, T. D. & Eby, L. T. eds. (2007) op.cit.

⁵ 筆者稿「米国におけるメンタリング運動の展開」『言語文化』（愛知淑徳大学）第11号、2003年。

⁶ (<http://www.cultol.org/>)

⁷ Ibid.

⁸ Ibid.

⁹ Champaign-Urbana One to One 事務局の掲示資料より。

¹⁰ U.S Department of Education Grant Performance Report (ED524B) Project Status Chart, PR/Award#:Q184B040315, 2007.

(本稿は平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C)一般課題番号19530731「メンタリング運動における学校の役割」による研究成果の一部である。)